

氏 名：酒井 久美子
学位の種類：博士（看護学）
学位記番号：甲 第 5 号
学位授与年月日：令和5年3月14日
学位授与の要件：学位規則第4条第1項該当
論文題目：[和文]
寝たきり非経口摂取高齢者への口腔ケアプログラムの効果
[英文]
Effects of an Oral Care Program for Bedridden Parenteral Older Adult Patients
論文審査委員：主査 百田 武司
副査 姫野 稔子 （主研究指導教員）
副査 河口 てる子 （第1副研究指導教員）
副査 鎌倉 やよい
副査 高田 由美

博士学位審査結果の要旨

本研究は、病棟看護師が実施する寝たきり非経口摂取高齢者に対する口腔ケアプログラムを作成・実施し、口腔ケア効果の調査と、口腔ケアプログラム実施に関する調査により、口腔ケアプログラムの効果を検討するものである。

口腔ケアプログラムの作成においては、病棟看護師の口腔ケアに対する認識を調査した先行研究や日本の看護におけるイノベーションの概念分析を基に、支援する体制、教育に着目し、口腔ケア実施体制、口腔ケア方法と、それに伴う指導からなる口腔ケアプログラムを作成した。口腔ケア実施体制は、ケア対象者の入院する病棟に勤務し、病棟で口腔ケアを実施しリーダーシップがとれる看護師1名をオピニオンリーダー（以下、リーダー）として配置し、口腔ケア方法の指導や実施の確認、病棟でケアを行う看護師・准看護師（以下、ケア実施者）からの相談役とした。そして、研究者がリーダーに口腔ケアについて指導し、リーダーはケア実施者に指導し、さらに実施の確認やケア実施者から相談を受けるといった役割とし、病棟内での口腔ケア実施体制を構築した。口腔ケア方法は、咽頭部への流入を防止する目的で粘稠度の高いジェル状保湿剤を使用した方法（以下、ジェルケア）を採用した。ジェルケアに伴う指導では、ジェルケア方法の手順書を作成した。口腔ケアプログラムの実施期間は4週間とし、ケアプログラム終了後3か月間は、口腔ケア方法や実施回数はケア実施者に一任した。

ジェルケア効果の調査は、1群介入前後比較デザインとした。ケア対象者は非経口摂取かつ寝たきりで、口腔ケアに全介助を要する65歳以上の者で、口腔ケアプログラム開始前（介入前）と

実施期間中と終了後 3 か月間の計 11 回の調査時点を設定した。調査項目は口腔アセスメントシート日本語版（以下、OHAT-J）と口腔湿潤度、それに口腔内細菌数とし、測定値については記述統計、経時的変化の検討には複合シンメトリを用いた一般化線形混合モデルで分析を行った。

口腔ケアプログラム実施に関する調査として、プログラム実施期間中の 4 週間と終了後 3 か月間、ケア実施者に実施記録用紙に記入してもらい、1 回のジェルケアに要した時間の平均とジェルケア実施率を 1 か月ごとに算出した。また、すべての調査終了後 1 週間以内に、口腔ケアプログラム参加したリーダーとケア実施者を対象に、ジェルケアに対する評価について半構造化インタビューを実施し、意味内容の類似性によってサブカテゴリー、カテゴリーを生成した。

予備調査により、口腔ケア方法、アウトカム（OHAT-J、口腔湿潤度、口腔内細菌数）測定の妥当性を確認した。

本調査では、ケア対象者は 7 つの病棟に入院する寝たきり非経口摂取高齢者 23 名で、調査期間中に 5 名の脱落があった。口腔ケアの効果の調査項目である OHAT-J は、介入前と比較して、介入後のそれぞれの測定時点で有意に得点が低下し、口腔内の状態の有意な改善が認められた。口腔湿潤度は、介入前と比較し、介入後 4, 6, 8 週目で、有意な上昇が認められた。一方、口腔内細菌数は、介入前後で有意な変化は認められなかった。1 回あたりのジェルケアに要する時間は全期間 4 分台で、その実施率は、口腔ケアプログラムの実施期間は 95.3%、プログラム終了後 3 か月間においては 94 % 以上であり、プログラム終了後においてもケアの継続が可能であった。さらに、リーダーおよびケア実施者へのインタビューの結果、リーダーの役割と活動、ジェルケア方法の評価と効果、ジェルケアの継続・拡大と、口腔ケアに対する意識の向上とケアの質の改善につながったことが明らかとなった。

寝たきり非経口摂取高齢者は、加齢変化による唾液分泌量低下と、非経口摂取のため口腔内が乾燥し口腔内状態が悪化しやすく、口腔内細菌数の増加を招き誤嚥性肺炎発症のリスクが高いにもかかわらず、有効な口腔ケアの方法が明確でない。また、新しいケア方法を臨床現場で実施していくためには支援する体制と教育が必要であるが、対象に有効であることが予測される口腔ケア方法やケア実施体制を包括的に計画し、実践・評価した研究はない。本研究では、口腔ケア方法としてジェルケアを採用し、臨床現場での口腔ケア実施体制を構築し、研究者が介入を行うのではなく指導に徹し、病棟の看護師がケア実施者となって介入することで、口腔ケアプログラムの効果を検証した点が独自性・新規性であり、学術的意義があると評価された。また、本プログラムが普及・実施されることによって、寝たきり非経口摂取高齢者の誤嚥性肺炎予防や QOL の向上につながることが予測されることから、本研究は、社会的意義が高いと評価された。

本論文は研究題目から研究方法、結果、考察に至るまで一貫性があり、研究の限界と今後の課題についても妥当な内容が記載され、説得力のある論文となった。

これらのことから、本論文は博士（看護学）の学位論文として価値があり、また、論文内容及び関連する事項について口頭試問を行った結果から全員一致で「合格」と認めた。